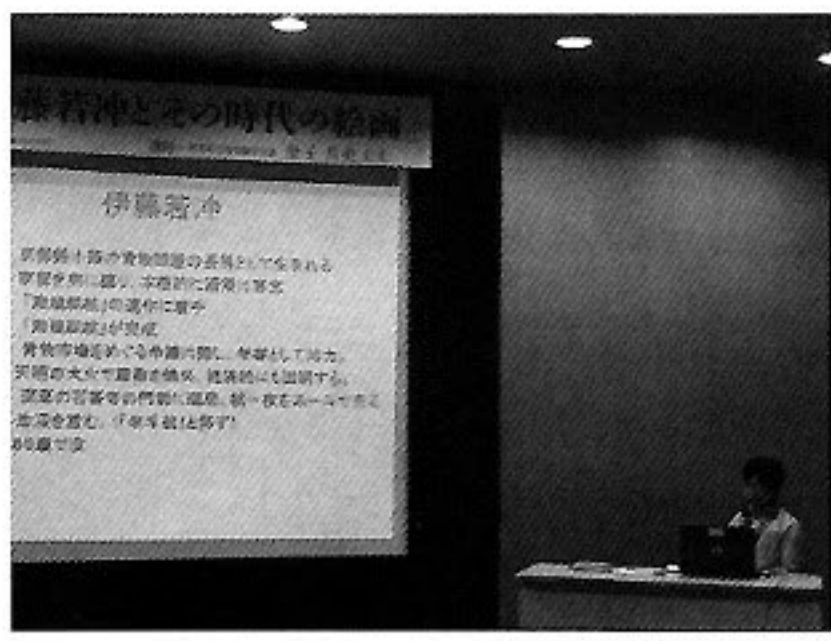


# 演題 「伊藤若冲とその時代の絵画」

熊本県立美術館学芸員 金子 岳史 先生



「美術講演会」は、一九七五年に坂崎乙郎氏による第一回「現代絵画はどこへ行く」から数えると、第30回になります。今回は、熊本県立美術館の金子岳史学芸員に、本館で開催中の「若冲と京の美術―細見コレクションの精華―」に関連して若冲の芸術の魅力や人物像などについてのお話をお願いしました。先生は埼玉県のお生まれで、東北大学文学部卒業後、大阪大学大学院文学研究



科博士課程修了。二〇一〇年より熊本県立美術館学芸員として勤務。二〇一五年大阪大学大学院より博士(文学)取得。特別展「雪舟流と狩野派―細川家を魅了した日本絵画の至宝―」(二〇一六年)などを担当するなど活躍されています。また、熊本市現代美術館で開催中の開館15周年記念「答のくまもと展」について、担当の富澤治子学芸員にお話を伺いました。(作家と連絡を取りながら制作をお願いしたり、展示を工夫したりするところなど興味深い内容でしたが、スペースの関係で省略しました。)

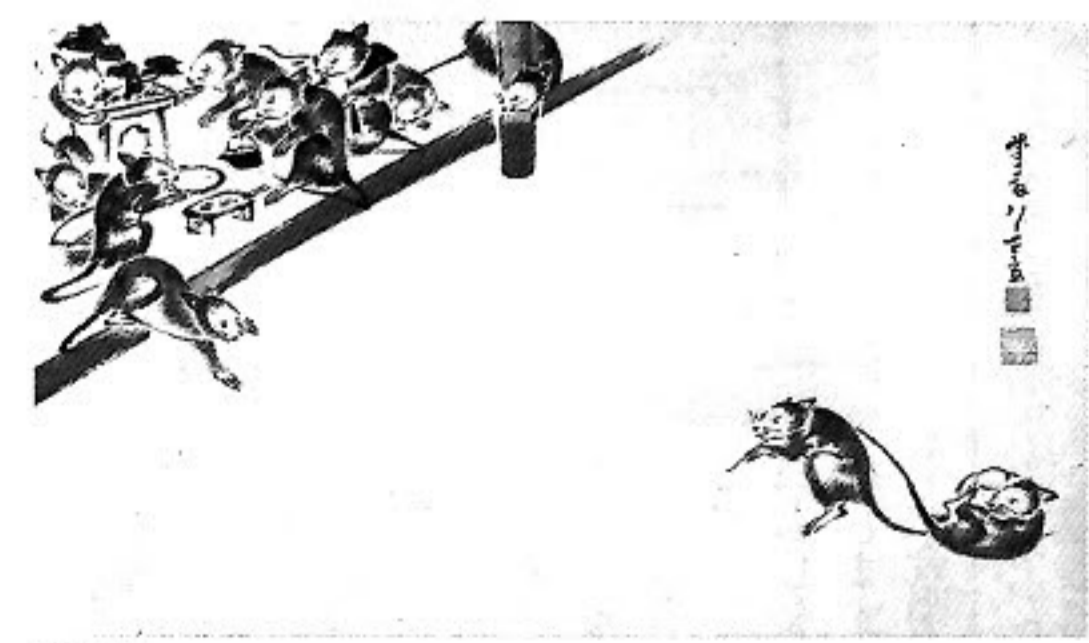
いま、伊藤若冲がブームのようになってあちこちで展覧会が開かれ、もてはやされていて、当館でも「若冲と京の美術―細見コレクションの精華―」を開催している。もてはやされるのは結構なことだと思うが、

若冲が特別な、とても突出した、時代から離れたような捉えられ方や宣伝をされているが、そうではないことを、最近の研究成果や時代背景を紹介することでお伝えしたいと考えている。

まず、伊藤若冲の紹介からすると、彼は一七一六年に京都の錦小路の青物問屋の長男として生まれた。青物問屋と言うと八百屋さんの問屋という感じだが、最近の研究では、この付近一帯の三千人の商人を取り仕切る非常に大きな企業のような所だったらしく、八百屋の息子というような感じではなかった。若冲はそのような家に長男として生まれたが、商売はあまり好きではなかった。それで一七五五年には家督を弟に譲り、本格的に画業に専念、一七五八年頃には《動植綵絵》の連作に着手して、一七六六年頃には完成している。一七七二年頃には、青物市場をめぐる

争議に際して、年寄として尽力する。一七八八年には天明の大火で住んでいた屋敷を焼失、経済的に困窮する。この時期を境に、絵具や墨の質が悪くなっているという研究者もいる。一七九三年頃には、伏見種荷の近くの深草の石筆寺の門前に隠居。絵一枚を米一斗で売り、「米斗翁」と称し、つつましくも豊かな生活を送っていたようだ。一八〇〇年に八五歳で亡くなっているが、八五歳というと今でも長生きだが、この頃の平均寿命は三六歳だったというからかなり長生きだったということになる。

今回の展示作品から紹介すると、まず《雪中雄鶏図》。三十歳代の作品で、若冲の画業からするとかなり初期の作品ということになるが、とても人気がある。次に《糸瓜群虫図》。これは長いヘチマに十一匹の虫が群がっているという作品で、ものすごく細かく描かれて、これも三八、九歳の時の作品。次に、最晩年七九歳の時の《鼠婚礼図》。鼠たちが婚礼をやっているという可愛らしい水墨画の作品。宴会をやっている鼠たちと右側から酔っ払った鼠の尻尾を引つ張ってやつてくる鼠との間が大きく空けられていて、見事に計算された空間構成になっている。



鼠婚礼図

次に代表作の《動植綵絵》。これは若冲が相国寺に寄進したものが、明治時代に廃仏毀釈で危機の時に明治天皇に献納され、相国寺を救った作品。今は宮内庁三の丸尚蔵館に三十点あり、一つひとつ解説していくと足りないような作品で、高級な絵具を使って細密に描かれた作品で、たくさんの動物や植物が驚くようなリアルさと鮮やかさ、細かさで、とても印象的な描き方をしている。最近の研究では、この《動植綵絵》には「裏彩色」という技法が使われている。「裏彩色」というのは、文字通り絵絹の裏側から絵具や墨を塗ったり、箔を貼ったりする技法で、

その効果によって微妙な表現の違いを出している。これは平安時代の仏画に使われていた技法で、この時代の画家では若冲以外にはほとんど使っていない。若冲はこの《動植綵絵》を仏画として描いている、という説もある。仏画は、極限まで贅を尽くし細密に描かれていて功德を得るといふものだから、同じような考えて仏画を描くようなつもりで、全く手抜きをしないで若冲が描いたものが《動植綵絵》であるということである。それから「昇目描き」と言われる技法がある。モザイク画のように見え、碁盤の目のようなものに描かれている。静岡の《白象群獣図》(個人蔵)は昇目が真四角できつちりと描かれ、一方有名なブライスコレクションの《鳥獣花木図屏風》の昇目にはゆがみが見られる。《白象群獣図》は若冲の真筆で、《鳥獣花木図屏風》は後の人が描いたものであろうという説もある。次に「筋目描き」と言われる、若冲が得意だった水墨画の代表的な技法がある。墨が滲みやすい画箋紙という

物や植物は、生物学的、図鑑的な正確さではなく、実際にそれを見た時の印象に忠実に描くという正確さであり、それで生き生きと感ずる絵になっている。彼が描く葉には必ずと言ってよいほど虫食いがあり、それは虫も含めたすべての生の営みを描きたかったのではないかと。

発刊して、これが後の若冲研究の研究者へ多大な影響を与えた。一九八九年にアメリカで「若冲の絵画展」が行われ、アメリカではブームになったが日本ではそうならなかったところが、二〇〇〇年に京都国立博物館で「若冲展」が開催されると、口コミで人気が高まり、特にデザインを専攻する学生たちに爆発的な人気を博した。ここが、最近の「若冲ブーム」のスタートになり、いろいろな研究者が研究を始め、展覧会も各地で開催されるようになった。そう

に市場の必要性を訴えさせるなど活動し、騒ぎを大きくしてついに翌年八月末に公認を勝ち取った。つまり、隠棲して世の中の動きに無関心で絵画に没頭していたという若冲像とは、まったく違う姿が浮かび上がってきた。

中国製の紙の性質を生かした技法で、滲んだ墨の上に墨を重ねると、境目に薄い白い筋のような線が残るといふもので、これを利用して花びらや鳥の羽を描いている。若冲が描く動

そんな若冲の人物像については、「音曲や女性との付き合い、酒の宴など、一般の人が楽しむことにも全く関心がなかった」とか「鶏を数十羽、庭に飼い、それをひたすら観察して絵に描いていた」、「絵画に没頭し、三十年が一日のように過ぎていった」という風に、つまり、世間から孤立し、ひたすら絵画に没頭した「変わりものの絵師」というイメージが、これまで伝えられてきた。しかし、最近ではこれは若冲自らがこういふ風に見てほしいという作戦・演出だったのではないかと考えられている。

いう中、二〇〇八年に「京都錦小路青物市場記録」が紹介され、人物像の見直しが行われた。実際は、一九九九年に滋賀大学の経営史の研究者がその論文で「若冲が、錦小路青物市場の存続に奔走して公認を勝ち取った」ことを明らかにしていたが、その時は若冲が画家でもあったことに誰も気づかなかった。「京都錦小路青物市場記録」によると、その騒動は、一七七三年商

最後に、江戸時代の「画壇の状況」から、若冲が活躍した時代はどんな時代だったのかを見てみたい。若冲は十七世紀に中国から伝わった「黄檗文化」の絵画の影響を強く受けているが、当時は江戸幕府の御用絵師として狩野派があり、十七世紀の風俗画から発展した江戸の中流の町人や庶民向けの浮世絵があり、また金持ちや公家向けには尾形光琳などの琳派があった。若冲の絵画は京都の文化人たちの豊かなネットワークの中で支えられ、京都の豪商、学者、文人、僧侶、などが若冲絵画の受容者だった。十八世紀の京都の若冲の周りには、写実的な絵を描いた

中国やオランダの文化の影響も伝わって来て、それらを吸収して豊かになっていく。そういう時代に、京都で活躍した若冲は、「中国文化の積極的な受容者」、「目の前の現実を伝統文化の中に置き直して描く」(鶏を鳳凰や孔雀の代わりに花鳥画に描く)、「新たな文化を積極的に取り入れ、時代の先端にあった画家」、「家業の商人としてもリーダーシップがあり、公正で冷静な判断力の持ち主だった」などが実像である。

(要約文責・井上正敏)

中国製の紙の性質を生かした技法で、滲んだ墨の上に墨を重ねると、境目に薄い白い筋のような線が残るといふもので、これを利用して花びらや鳥の羽を描いている。若冲が描く動

若冲という画家はこれまでどのように紹介されて来たかと言うと、一九二六年に秋山光夫氏により研究が始められ、翌年には京都で「若冲画選」という展覧会も開催されたが、注目はされなかった。ところが一九七〇年に辻惟雄が「奇想の系譜」を

衝は家業は引退した身ではあったが、町年寄として中心になって事態の打開に奔走、いざとなれば死罪覚悟で江戸に直訴に行く覚悟で、粘り強く交渉した。青物を売る百姓の村々から奉行所

の池大雅、蕪村、奇想の曾我蕭白などがいた。教科書では十八世紀の文化は江戸中心に語られているが、美術史における江戸時代の黄金時代は、若冲が活躍した十八世紀後半の京都・大阪にある。京都には伝統的な王朝文化の土壌があり、長崎から

